「ただ、お言葉を下さい」（ルカによる福音書七章一～一〇節）

1　再び、カファルナウムへ

今日の箇所から福音書の舞台は再びカファルナウムになります。ガリラヤ湖の北西岸に面した港町です。狭い意味でのイエスの郷里といえば、ガリラヤのナザレですけれど、カファルナウムは、三〇歳で神の国の宣教を開始した（三・二三）イエスにとって、活動の本拠地といってよい場所です。

イエスはカファルナウムを「自分の町」（マタイ九・一）とも呼んでいます。そこにペトロの家もあり、その家が伝道の拠点にもなっていた。徴税人マタイが召命を受けたのもカファルナウムです。「聖地旅行」をする人には、まさにはずせない訪問地の一つです。

カファルナウムがどんな町で、どのくらいの人口であったか、詳しいことは分かりません。しかし北のシリヤ（ダマスコ）とガリラヤを結ぶ交通の要衝であり、ローマ軍が駐在していました。

今日の箇所に、名前はありませんが、一人の百人隊長が出て来ます。ローマ軍のしかるべき地位の人です。出て来ますというより、彼とイエスの出会いを巡る話、それが今日の聖書の内容です。まさにカファルナウムならでは出来事です。

> イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いにやって、部下を助けに来てくださるように頼んだ（一～三節）。

少し込み入ったところもあるので、全体の経過をはじめに簡単に申し上げておきます。なお「部下」とあるのは、軍隊組織上の「部下」というより、百人隊長の家で働いている「僕」（しもべ）、奴隷のことです。

百人隊長からイエスへの取次を依頼されたユダヤ人長老たちは、イエスのところに赴いて、百人隊長の僕を助けてくれるように懇願します。イエスはこれに応じ家に向かいます。

ところが、もう少しで家に着くというとき、この百人隊長のところから別の使いが来て（この使いは「友達」と書いてあります。一人ではなくて複数です）、六～八節に書いてあるように、ご足労には及ばない、また自分から出て行くのに自分はふさわしいものではない、ただ言葉をください、救いの言葉をください、それだけでいいのですと、イエスにいわせます。

これを聞いてイエスは、イスラエルの中にも見られないほどの信仰の言葉を異邦人である百人隊長から聞かされて驚き、賞賛し、それをイエスに付いてきた群衆に語った、というのです。

そしてこの二度目に使いに行った人たちが百人隊長の家に戻ってきたときには、僕

はすっかり元気になっていたのでした。イエスは結局百人隊長の家にも行かなかったし、その僕にも会わなかったと思われます。

これが一つのいやしの出来事であることは間違いありません。直接のいやしではなく、いわばリモートによるいやしです。しかしそれ以上に、この出来事は、百人隊長という異邦人に、神の憐れみが注がれた、福音が伝えられたという特別の出来事をふくんでいるものです。

2　ユダヤ人の長老たちとイエス

いま少し申し上げたように、これがイエスの一つのいやしのわざであるのは、その通りですし、また福音がイスラエルと異邦人の垣根を越えて広がっていく、その重要なケースには違いありません。

出来事のこの中心的な意味を私どもは見失わないようにしなければなりません。しかし同時に私にとって興味深いのは、この出来事の過程で、イエスとはだれか、あるいはイエスの生き方が、いろんな人との関わりを通して、それを背景に、浮き彫りになっているように思われることです。

その中ではじめに考えてみたいのは、百人隊長から、イエスへの執り成し、取り次ぎを依頼されたユダヤ人長老たちのこと、その言動です。

> 長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです」。そこでイエスは一緒に出かけられた（四～六節）。

何より考えてみたいのは、ユダヤ人の長老たちがイエスを説得しようとしたその言葉です。百人隊長の長老たちへの依頼は、イエスが助けに来てくれるようにしてくれないかということでした。イエスを説得する長老たちの言葉には、彼らの思いが表れています。長老たちは言います。われわれは百人隊長から、会堂をつくってもらうなど、いろんなことをもらっている、何よりこの百人隊長はユダヤ人を愛している、われわれも恩義を負っている、お返しとして、何かしなければならない、イエスよ、あなたもあなたができることをしてくれないか、百人隊長はまさにわれわれがそうするのに「ふさわしい」人だというのです。

もちろんふつうにいえば、こうした説得の言葉に何も問題はないといっていいと思います。

してもらったんだから、われわれもそうすべきだ。そしてこれが、当時、ローマに支配されたユダヤの指導者たちの、支配者との付き合い方でした。またこれがいまも世の常識というものです。

そう考えると、ルカによる福音書が、「そこでイエスは一緒に出かけられた」とつづけて書いているので、まるでそのユダヤの長老たちの言葉に促され、同意してイエスが、彼らと一緒に百人隊長の家に向かったと受けとれるようにも見えますが、それは大きな誤解ではないでしょうか。

なるほどイエスは一緒に出かけます。しかしそれはユダヤの長老たちの言葉に説得され、そうだなと思って出かけたのではないのです。

先週まで取り上げた「平地の説教」のイエスの言葉を思い出します。「自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか」（六・三三）。あるいは、自分を愛してくれる人を愛する、返してもらうことを当てにして貸す。それが絶対に悪いというようなことではありませんが、これがこの世の習い、この世の知恵です。世の現実です。

これに対してイエスが弟子たちに教えたのは、父なる神の憐れみにならって、「あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」ということでした。とすれば、イエスが彼の家に赴いたのは、百人隊長とその僕のことを思うその憐れみによるのです。いやしのためにイエスは赴きます。そのときすでに、相手がユダヤ人か異邦人であるか、問題になっていません。地位の高い人か僕か、そこに仮に境界があるとして、イエスは乗り越えています。イエスの行動の動機がどこにあったか、私どもは明らかに知っておく必要があります。

3　神の憐れみ

この百人隊長は、彼の愛する僕が瀕死の病気になったことで、なぜイエスとのコンタクトを願ったのでしょうか。百人隊長が「イエスのことを聞いた」としか書いてありません。それで、しかし十分です。カファルナウムでのイエスの目覚ましい働きのことは、よく知っていたからです。

彼はローマ人、異邦人です。しかし彼は、とくに使徒言行録にしばしば出てくる「神を畏れる人」であったようです。ユダヤ教の会堂を建ててくれたと長老たちは、彼のしたことに感謝し賞賛していますが、やはり特別徳の高い人で、住民の信頼を勝ち取ろうとして、つまり政治的な動機からそうしたことをしていたようでは必ずしもなさそうです。ユダヤの神に畏敬の念をいだき、その宗教組織に対してもていねいな対応をしていた人と考えてよいと思います。

その百人隊長が、今日の聖書によれば、イエスとの取次をユダヤ人の長老たちに頼んだのに、追いかけるように別の使いを出したのです。

> ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いにやって言わせた。「主よ、ご足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。ひと言おっしゃってください。そしてわたしの僕をいやしてください。わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」（六～八節）。

ここは「ところが」とはじまっています。二回目の使いを出したことは、福音書を

書いたルカにも驚きだったのです。

最初の使いと二回目の使いと、一つの大きな違いは、この度は「友達」を使いに出したことです。友達を使いとして送るということは、相手を尊重し、愛に満ちた関係をつくりたいという思いの現れでもあります。

それに象徴されているように、イエスに対するこの百人隊長の関わりは、さっきとはずいぶん違ったものになっています。あなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではない、という言葉には、非常にへりくだった態度が明らかです。また、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくない、という言葉には、異邦人として、救いを願い出る何の資格ももたない、ただ神の憐れみにすがるほかない汚れた者だという思いが表れています。

それだけでなく、「わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」という言葉には、神の言葉に対する積極的な信頼が、はっきり言い表されています。

イエスは、百人隊長の言葉に、神の言葉、神に対する信頼、そして信仰を見いだしてくださったのです。「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と。

イエスが驚き、そして賞賛した信仰、それは神の言葉への信頼です。それはここでは「権威」という言葉で暗示されています。

ここでは、この権威という言葉は、何よりも、言葉が実現する、言葉が出来事となるという意味で使われています。たしかにこの神の言葉の権威への信頼と信仰こそ旧約聖書の信仰の本質でもありました。私どもは、たとえばイザヤ書の有名な言葉を思い起こしてよいと思います。

わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、私が与えた使命を必ず果たす（五五・一一）。

神の言葉は神の思いを実現する、神の言葉とは神のみこころ。この言葉の権威には言葉の自由、力、権能、あるいは支配などの意味も含まれます。百人隊長は、イスラエルの歴史における神の働きなど、みな知っていたわけではない。しかし神の言葉の権威をイスラエルの信仰の中心にあること洞察し、かつそれを言い表したのです。それは異邦人の口から出た、驚きの信仰の告白でした。この神と神の言葉に対する信頼と信仰を、私どもも、百人隊長と共にもちたいものです。

この神の言葉は、新約聖書の信仰によれば、イエスの人格として受肉しました。神がどのような方か、それはイエスにおいて、その人格と言葉と行為において啓示されています。イエスの恵みと憐れみ、それは神の恵みと憐れみです。神の言葉に聞くとはイエスに聞くこと。それゆえ私どもはイエスの行動に目をこらし、イエスの語ることに耳を向けなければなりません。イエスは神の憐れみそのものとして百人隊長の家に向かわれたのです。

（二〇二一・六・二七）